

# バランシン振付『アポロ』

イングリッシュ・ナショナル・バレエのリハーサルを、マギー・フォイヤーが取材しました。指導者とダンサーの語る作品のポイントとは――



『アポロ』リハーサルでの  
高橋絵里奈  
Photo: Dance Europe

指導するのは、1987年からバランシン財団の一員として『アポロ』の上演指導にあたってきたナネット・グルジャク。繰り返しこの作品を踊ってきた彼女をして「1928年の初演というのが、今も信じられない」といわしめるほど現代的なこのバレエ。バリシニコフとも共演経験のある彼女だが、「ミーシャは、バランシンのスタイル、とりわけジャズの要素にもっともうまく適応したロシア人ダンサーだと思います。ダンス・クラシックの決まりごとを忘れて、ひとつのフレーズの終わりが同時に次のフレーズの開始でもある独特の音楽性に、馴染めないダンサーもいるんですよ。バランシンはバレエの新次元を発見し、装飾性を取り去った人ですが、『プティパがいなかったら、私は振付家になろうとは思わなかった。プティパこそがバレエの語彙、特に女性の踊りとポイントを確立したんだからね』と、よく言っていました。」

タイトル・ロールのアポロは、「誕生シーンを上演に含めようと割愛しようと、生まれたばかりの存在であることに変わりはありません。どこをとっても純粹無垢で、でも生まれつき不遜なところがある。なんといってもゼウスの息子ですからね。そして、ミューズたちを虜にすることで、自信を深めるのです。」アポロ役ワディム・ムンタギロフは、自分と役柄との間には「短期間に成長を遂げた青年」という共通点があるという。ステップも感情表現もたいへん難しいが、「両方が影響しあって、向上していく」と感じている。ズデニェク・コンヴァリーナは、すでにヒューストン・バレエとナショナル・バレエ・オヴ・カナダでこの役を踊っているが、「再演のたびに発見があり、改めて価値ある作品だと感じます。誕生シーンはある方が好きですね。布を取り去る場面で、心の準備ができるので。でも今回は新しい気持ちで挑戦して、もっと強いアポロを表現したいです。」

ダリア・クリメントヴァは、テレプシコレー役が大好きだと語る。「舞踊の女神だから、いちばん踊りが多いの。アポロとのパ・ド・ドゥを踊るのは、勝者だということ！他の女神たちも懸命だけど、アポロが選ぶのは彼女たちではないの。」クリメントヴァは、初めは音楽が難しいと感じたという。「プティパはいつも4カウントや8カウントの踊りやすい曲だけど、ストラヴィンスキーは9とか5とか、そういうカウントしづら

いものが多いの。でも今ではすごく気に入っています。ソロはただ舞台に出ていって、楽しんで踊っています。音楽が複雑だからこそ、アーティストが自分なりの解釈やアクセントで踊る余地がある。そこが好きになりました。ダンサーの中で成長していく役で、これを踊れて幸せです。」

ベゴニャ・カオは、カリオペ役だ。「これはドラマティックで、だから私に来たんだと思う。バランシンを踊ると、彼が女性たちを愛していたことがよくわかって、自分が特別な存在に感じられます。ナネットはカリオペのポイントをたくさん教えてくれました。情熱的で、ステップだけの役ではない。ちょうどその中間で、両方をものにすることもできれば、やり過ぎになってしまう危険もあるの。」

ポリヒュムニアのセンリ・コウは、バランシン作品にはこれが初めて。グルジャクは、2番目に踊られるこのソロが技術的にはもっとも高度だが、コウは常に冷静だという。「楽な作品なんて、ないんです。」片手の人差し指を唇にあてたまま踊るので、制約もとても多いと、コウは語る。「そして最後の瞬間に、彼女は自分がマイムの女神であることを忘れて、声を出してしまう。大失敗ですよ。終盤のピルエットでは、彼女の本来の資質をはっきり出し、それらしい表現を心がけています。自分で確信を持って踊れなくてはと思いますが、ナネットは素晴らしいですね。ヒントをたくさんいただきました。」

別の日にテレプシコレーを踊る高橋絵里奈は、バランシン・スタイルできちんと踊るためには、腕も重要だと指摘する。「アームスは速いけれど、慌ただしくはいけません。肩を動かし過ぎてもいけないし。」グルジャクは、テレプシコレーは「女性性の極致。えもいわれず美しく、もちろんアポロも彼女に恋をします。それに加えて踊りをしっかり見せることが、たいへん重要」と語る。3人の女神のラインのバランスが作品の出来を左右し、とくにアラバスクではそれが重要だ。高橋は「よく打ち合わせをしてアイコンタクトを取るの大切」といい、親密な共同作業を楽しんでいる様子だ。コンヴァリーナは、『アポロ』は「うまくかみ合うと、完璧な作品だという。女神たちが手を叩き、僕がその掌に頭を乗せる。神々の声が聞こえ、パルナソス山に登ってゆく。とても疲れますが心も高揚して、ほんとうに素晴らしいバレエです。」(訳:長野由紀)